

[美術史料紹介]

池大雅模刻『賞奇軒墨竹譜』一冊

—宝暦10年(1760)、竹苞楼刊—

江戸時代の南画家、池大雅は安永5年(1776)4月13日に、54歳で亡くなりました。お墓は京都市上京区の浄光寺にあります。

本年(1996年)は、大雅が没して220年目にあたります。

昨年4月、東京の某書肆の「古書目録」に大雅自身が刊行した画本『賞奇軒墨竹譜』が載せられているのを見つけました。早速、注文したところ、幸い入手することができました。意外にも、初刷りの善本で、これには驚きました。その後、この本は、縁あって大雅作品の蒐集家である東京のK氏の所有になりました。

大雅の『賞奇軒墨竹譜』は、大雅研究者でも実際に手にとって見た人は少なく、まぼろしの画本といわれていました。

かつて書誌学の竹清・三村清三郎氏と美術史家の香雨・相見繁一

氏がそれぞれ『賞奇軒墨竹譜』を所蔵されてきました。竹清本には外題がなく、香雨本には扉題がなく、いずれも完全な本ではありませんでした。そうしますと、K氏本は、大雅研究にとって貴重な史料ということになります。

ここでは、この新出の『賞奇軒墨竹譜』の概要を簡単に紹介することにします。いずれ、その詳細な研究報告は、大雅研究者によってなされることとあります。

この本は、美濃判(縦27.4㎝、横18.3㎝)一冊で、袋綴じ和装。序文は二丁、竹譜は四十丁、跋文は二丁、扉題は半丁(おもて表紙裏に貼付け)、奥付は半丁(うら表紙裏に貼付け)。表紙は薄藍色で、貼題箋には篆書で「賞奇軒墨竹譜」と墨刷りされています。その外題の書は、おそらく大雅によるものでありましょう。見返しの扉題に

は「東坡遺意」とあり、これは、中国清時代の康熙年間に刊行された『賞奇軒四種』のうちの一冊「東坡遺意」のその扉題をそっくり模刻したものであります。

扉題につづいてすぐに序があり、大雅の友人で一歳年下の儒者、高葛陂(1724~1776、名は道昂、字は伯起)が宝暦9年(1759)閏7月15日に「刻東坡画竹譜序」と題した一文を書いています。版下の書は、大雅の門人の原寧(姓は源、号は玉海)によるものです。この序文には、本書の成立ちについて興味深い記事が記されているので、つぎに紹介します。

「刻東坡画竹譜序、(略)、平安池君貸成夙有子猷之癖、乘興之時旁求子瞻之遺云、子瞻遺意有華本、貸成適得而不趨於玄珠、乃貼之東壁、彷徨其側、盤礴其下、揮毫以擬其化、乃今模写而鏤之、(略)」

大雅(池貸成)は、晋代の王子猷のように竹が大好きで、さかんに墨竹画を描きました。あるとき、大雅は、宋代の蘇東坡(子瞻)の画法による「竹譜」(康熙刊『賞奇軒四種』「東坡遺意」)を入手し、大いに喜びました。これを一枚一枚に

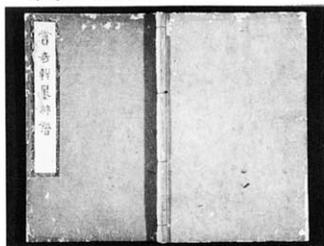
して、画室の東の壁に貼り、たえずその前を行ったり来たりし、座臥しては賞翫し、蘇東坡竹画法の遺意を得ました。

大雅は、これを秘蔵することにしのびないで、ついに自ら筆をとり、これをそっくり模写し版下をつくり(大雅が変更している箇所もあり)、自ら版本に彫り、京都の書肆「竹苞楼」(佐々木惣四郎)から出版しました。奥付によりますと、宝暦10年(1760)2月の刊行で、大雅38歳のときでした。この本の跋文は、『古銅印彙』の著者として知られる安濬子深(安田理右衛門、平安人)であります。また、奥付の欄外に「明和元(1764)甲申、坂正壽(印)」の墨書があり、刊行の4年後に坂氏が手得したことが知られます。他の蔵書印は「扇洲」、「ヨコスカ坂丈」。

大雅の画本は、この『賞奇軒墨竹譜』をのぞき、すべてその没後に出来たものです。大雅が自らが手を下した画本としては、本書が唯一のもの。

本書は、大雅の揮毫生活の様子を伝え、その人柄を知る貴重な資料といえましょう。(林進)

① 賞奇軒墨竹譜・表紙 大雅模刻 東京・個人蔵



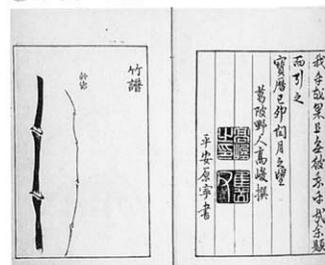
② 扉題・序(1)



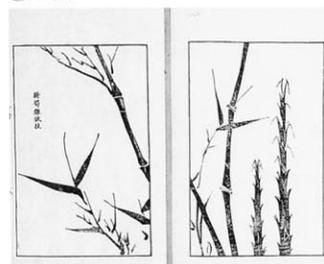
③ 序(2)



④ 序(3)・竹譜



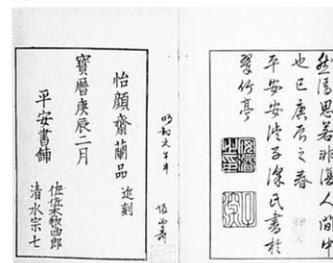
⑤ 竹譜



⑥ 竹譜



⑦ 跋・奥付



⑧ 唐本『東坡遺意』京都・個人蔵



季刊 美のたより No.115
平成8年5月23日
発行 大和文華館